

児童教育を支援する
「博報財団」が、すぐれた
取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

教育活性化部門

福岡県

大牟田市立吉野小学校

学校と地域の目標は
明るくきれいな
自分たちの町づくり

吉野小学校の5年生が「総合的な学習の時間」で取り組んでいるのが、かつて「桜の学校」と親しまれた学校を、再び桜でいっぱいしようとする「吉野小さくらプロジェクト」の活動だ。

この日、5年生のクラスには、地域の総合まちづくり協議会の「さくら絆プロジェクト」のメンバー数名が、ゲストティーチャーとして参加し、「自分たちの取り組みができるかできないかを地域の方と話し合おう」を学習のめあてに、授業が展開されていた。

『自分たちの取り組み』とは、桜の植樹と管理のこと

す。開校から60年を迎え、学校の桜も寿命とされる年月が経過しました。老木化した桜を、いかに管理するかは大きな課題ですが、子どもたちだけでは難しい。そこを、地域の方に一緒に考えていただいています（本村恭彦教諭）

授業では、児童が4〜5人の班に1人のゲストティーチャーがついて、活発な話し合いが展開した。

「草がたくさん生えているということは、土にたくさん栄養があるということなので、肥料は十分だと思います」「立ち枝や逆さ枝、絡み枝がありますか、こつした枝は切ったほうがいいですか」

「幹が大きくなるためには、枝を整理した方が、その後の成長がよくなるということもあるんだよ」

桜の木の写真を見ながら、必要な手入れについて発言する子どもに、ゲストティーチャーが適切なアドバイスや考え方を示していく。

ゲストティーチャーの1人で、総合まちづくり協議会子

ども育成部リーダーの中嶋さんは、「子どもたちの目標が、明るくきれいな自分たちの町づくりにあるということ聞き、私たちの『さくら絆プロジェクト』と想いは同じだと、一緒に活動を始めまし

た。子どもたちはゴミ拾い活動や高齢者に優しい町づくりなどにも積極的に取り組んでいます。いつか大人になったときに、故郷に自分が手塩にかけた桜が咲き誇っていたら……。それはすごく幸せな光景になるのではないでしょうかと、微笑む。

自ら地域に働きかけ、参加し、発信する
子どもの姿

活動のきっかけは、吉野小学校の元教諭で、桜をかたどった校章をデザインした木村和子氏と、子どもたちの出会いにさかのぼる。

子どもたちは木村氏から、開校当時、学校には100本近くの桜があり、地域にもたくさん桜があったこと、子どもたちが桜の木のまわりで遊んでいて、それは美しい光景だったという話を聞いた。

すると地域に関する意識が希薄で受け身だった子どもたちに、「桜で美しい吉野を取り戻したい」という想いが芽生えたのだという。

「子どもたち自らが、桜で

いっぱいの活気ある町にしたいと活動はスタートしました。これまでの主な活動は植樹でしたが、今年からは管理が活動の軸に。剪定や柵をつくることなど、子どもたちだけでは難しい作業や工程もあり、地域の方とは、これまで以上にきめ細かい協働が求められています（坂本校長）

九州新幹線の開通と同時に、道路の整備や宅地開発が進み、かつての豊かな自然環境も変化の時を迎えた町で、地域と一緒に町づくりを進める意義は深い。

活動を始めて6年が経ち、子ども、学校と地域の関わりがよい循環になってきたと坂本校長は語る。

「子どもたちは地域の方に積極的に挨拶し、祭りやイベントに参加する機会も増えました。そして子どもをきっかけに、親世代も地域への興味を増し、積極的に関わるよう

になりました。また、地域の方からは学校行事への参加やペットボトルキャップ回収などに加え、異動してきた先生に本校の活動状況を伝えてくださるなどのご協力をいただいています（坂本校長）

5年生の児童は語る。「地域の人たちと想いを共に、これからも活動したい」「桜が長生きできるように、地域のひとががんばりたい」自ら地域や社会に働きかける子ども——「吉野小さくらプロジェクト」をきっかけに、その姿は見えてきている。



子どもたちと地域の方、副市長による桜の植樹の様子。市政100周年の記念樹として植えられたこの桜も、地域の方と相談・協力しながら、子どもたちが管理や手入れを行っている。

学校と地域が協働して目指す 美しい桜が咲く、明るい町づくりと 地域の活性化

九州新幹線が開通するなど変わりゆく町で、子どもたち自らが、桜でいっぱいの活気ある町づくりを目指して、地域と協働する活動に博報賞が贈られた。

推薦者 お祝いのことば

福岡県大牟田市教育委員会 安田昌則 教育長

「博報賞」という名誉な賞を受賞されましたこと、誠におめでとうございます。教育長としても元校長としても大きな喜びと感謝の気持ちで一杯です。「桜で美しい学校へ」「桜で美しいまちへ」は、子どもと地域の方々の思いや願いが重なり、学校と地域との協働を象徴した桜プロジェクトとして進められています。現在、本市の全公立学校はユネスコスクールに加盟し、ESD（持続可能な開発のための教育）を推進しています。吉野小学校のように、本市の子どもたちが故郷を愛し、地域の方々と一緒に持続可能なまちづくりに向け、主体的に活動していくことを願っています。



「肥料を買うお金はどうしよう？」「桜せんべいの収益が使えるのかな？」など、活発な議論が続いた。



吉野小は、ユネスコのESD（持続可能な開発のための教育）実践校でもある。



吉野に誇りを持つ子が増えたと坂本智典校長。



和菓子屋さんの協力でオリジナルの桜せんべいを製作。イベントでの収益は桜の管理にあてられる。